

奈良高専 図書館だより

No.11

記事

読書感想文特集号

入選作品（8編）

奈良高専必読図書100選

1982年1月 奈良工業高等専門学校 発行

昭和56年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会
国語科

毎年恒例の、夏休み課題図書を読書感想文コンクールは、今回で6回めになります。国語科と図書館委員会図書部会の教官とで慎重に審査した結果、次に掲げる8名の諸君の作品を、優秀作として選出しました。氏名をここに紹介して、努力をたたえたいと思います。

1 MA 池田 豊（若き日の思い出）	1 MB 鈴木俊之（天声人語Ⅰ）
1 C 中村 剛（高熱隧道）	2 E 澤野井 幸哉（高熱隧道）
3 MA 大隅 慶明（狭き門）	3 MB 長井 孝之（海と毒薬）
4 MB 石川 英敬（黒い雨）	4 E 和田 徳洋（パリ日本館だより）

なお、上記のうち、特に長井、大隅、鈴木3君の作品は、角川文化振興財団主催の「読書感想文全国コンクール」応募作品として送付しました。

そのほかに、佳作として選ばれた諸君は次のとおりです。

1 MA 岩井隆行	1 MB 藤城孝志	1 E 林 宏一	1 E 福山雄二郎	1 C 高橋美貴
2 MA 永野 豊	2 MA 藤丸良介	2 MB 古橋洋一	2 MB 松村貞彦	2 E 竹本隆之
2 C 原 義則	2 C 馬場 進	3 MA 寺田 勝	3 MB 上田真弘	3 E 村井弘光
3 E 村上 隆	3 C 中伝 守	3 C 三浦幸晃	4 E 清水 隆	4 C 道畑日出夫

「若き日の思い出」を読んで

IMA 池田 豊

私は今回の感想文を書くのにあたって、この小説を選んだのだがこの動機というのは、同じ著者の作品である「友情」を読んで、さわやかな感動を覚え、また武者小路実篤の無垢で純粋な魂を感じたので「若き日の思い出」にもその様な感動を期待し、読んでみることにしたのだ。

早速、この小説を読んでいると、やはり、自分の内にひしひしと痛感されるものがあった。それは、この小説は、ただ単なる恋愛小説ではなく、人生への希望生命への歓喜を語っていると思うのだ。また、「友情」の中に見られるような熱い友情をこの作品の中に持っていると思うのだ。

この小説の主人公である野島青年は、非常に臆病で毎日を明日は果たしてこの地上にいるのだろうかと思いつつ生きていたのだ。そして彼は、正子という女性に一目惚れしてしまうのだ。自分はこの時点から恋愛の進行が緩られていくと思ったのだが、仲々うまくいかないのだ。しかし正子の兄の正治と熱い友情が結ばれたので正子と顔を会わず機会が多くなり彼としては生きがいのある日々を過ごしていくのだが、自分は野島のこの様な点は嫌いだ。性格が臆病で気が弱いので仕方ないかもしれないが、自分が好きな女性をただ影でこそそそ眺めているようではなさけないと思う。でもこれが野島青年の純粋さの一つだと思ふ。

また野島青年はこの恋に悩む生活の中で正子の父と出会い、彼の人生観を強められ、また友人の川越という青年に出会い、絵画を通して生命への歓喜を覚えたのだ。この様な体験に対しての彼の感動は、彼が後から書いた詩を読めばよく解る。

生きよ！生きよ！死ぬまで、力強く生きよ！
どんな事をしてもし生きられる限り。

自分はこの詩を読んだ時、何か魂に響くものがあった。この詩は、現代の人々に欠けている生命力に火を点す様なものだろう。死を粗末にする今の世にこそ、この様な詩が生きてくるのだと思ひ書いてみた。

またこの辺りから野島青年という人物が変わってきた様に思える。初めは、純粋さだけ、体も軟弱で頭も悪くはないが良くもない様な男だったが、一転して人格が変わってたくましくなっ様に思える、一人前に女性を恋することもでき、希望に向かって突っ走れる。もう完全に男に成長したと思う。そして彼は正子と結ばれるのだが、自分は二人が結ばれたことを幸せだと思ったのではない。ハッピーエンドでよかったと思う人がいると思うが、自分はここで野島青年がたくまし

く、男らしくなったことを賛美したいのである。今の人々にはこの様な純粋さが大切だが、ある面ではたくましさも大切だと思う。今日の様な若者が無気力な時代に雄々しく生きることが必要なことだ。だからこそ自分も純粋さの一面、たくましさを備え付け、この時代を胸を張り生きていきたいと思う。

「天声人語 I」を読んで

IMB 鈴木 俊之

「天声人語」は、明治時代に始まって現在に至るまで続いている朝日新聞のコラムである。執筆は新聞社内の最も筆力のある論説委員が担当してきたという。したがって「天声人語」は単に紙面の一隅のコラムではなく新聞の顔である、と言ってもまちがいない。読むだけで政治の、経済の、文化の断面がわかる。今、という時代がわかる。だから私にはとても興味深いものだ。

私は昭和三十九年、東京オリンピックの年の生まれ。戦争は知らない。それだけに、終戦直後の昭和二十年からの五年間の生まれ変わろうとする日本の苦悩の姿をおさめてある「天声人語 I」を読んできたくなったという訳だ。

この時代、街は空襲で破壊され、食糧も住むところさえも失って、今日一日の生活がやっとというような人々であふれかえていた。政治では憲法が改正されたが、その足もとは危うげである。しかし、こんな世の中でも徐々に落ち着いてきて、生活の安定、政治の自立が進み、文化の活力がよみがえってくる様子が見える。

昭和二十年二月十五日の「失業者対策」では現代の失業者の生活からは想像もできない苦しみがわかる。

「まったく着のみ着のまま、飢餓と貧困とに悩まされつつ壕舎かバラックか、そうでもないまでも親戚、知己、友人の好意によって辛うじて仮の宿を得るかの外はない。」という。衣食住のすべてが満たされていないのだ。また、二十二年の四月十五日にも「食えないからヤミ屋になろうか。」と書かれてある。食料が豊富にあり、むしろ余っている今日からはとても想像もできないことである。

また政治問題では、終戦直後の十月に「納得のゆく政治」という言葉が出てきた。

「納得のゆく政治が戦時非常施策を行う上に要求されたが、事実それはそれに反してあらゆる場合に納得のゆかぬ政治が横行した。」とあるように政治に対する国民の信用が全くない。政府の言いなりになって無謀な戦争をして負けたのだから無理もないだろうが、政府が信用されていない点では現代と似ているのではないだろ

うか。それでは戦後三十年間積み重ねた民主主義の歴史は何であったのかと言いたくなる。

しかし悪いことばかりではなかった。まず文化の面が人々の気持ちを柔らげ、勇気づけていった。二十一年九月、

「学生水上大会で古橋君が四百メートル自由形に本年度世界最高記録を出したのは理屈なしに愉快である。戦争で泥まみれになった日本の表情が、こういう業績によってだんだん明るくなってゆくのである。」正にその通りだ。敗戦から常に劣等感を味わってきた日本人の心を、十分にいやしたにちがいない。よほどうれしかったのか、この古橋君はあと二回も登場する。それから先日他界された湯川秀樹博士のノーベル賞受賞も紹介されている。この二つのニュースはどれ程日本国民の励ましになったことか想像以上である。それに比べて現在ではこのようなニュースに接しても無感動ではないか。この感動が日本再生のエネルギーであったのだ。

この本を読み上げて驚いたのは、三十年以上もまえの事を書いているとは思えないものが数多くあることだ。終戦直後と現在の高度成長期を過ぎた安定期とは状況が違い過ぎるが、人々の苦しみ、楽しむ心情に変わりはない。これからの日本の進路を占うならばこの「天声人語」を読んだ方が良いかも知れない。今の日本はどれも道はずれておかしな方へ行っているような気がしてならない。そうでなければ国内へ核を持ち込ませたり、軍備を増強したりはしないだろう。もしも今度、間違いを起したらもうやり直しはきかない。そうならないためにも終戦直後の日本の状況を思い起こして、軌道を修正しなくてはならない。

「高熱隧道」を読んで

IC 中村 剛

冒険心旺盛な人間であると信じている僕は、「高熱隧道」という本の読書案内で、『岩盤最高温度百六十五度を征服した難工事』しかも、ノンフィクションに近いものであるということに興味をもち、読み切る決心をした。

しかし、今読み終えて冒険などという幼稚なものは消えて、本当の自然の恐しさ、そして、その自然と戦う男達、特に指導的立場にある技術者の執念に対する驚きが、胸の中に深く刻み込まれた思いだ。

昭和十一年、第二次世界大戦開戦の直前、当時の政府は大阪の軍需工場の原動力を得る為に、日本の最多雨地帯である黒部峡谷に発電所を造設することを決定した。ダム建設予定地は樺平からさらに二十キロメートル上流の狹間ですら滅多に足を踏み入れない仙人谷

であった。間もなく、軌道トンネル掘削工事事務所長の根津と工事課長の藤平が、多くの技師を伴って仙人谷を踏破した。ただし、道中一人の転落者を犠牲にして。その時、若い技師達は恐怖のあまり、立ちすくんでしまった。文中ではその技師達の眼を次のように言っている。「そうした眼の色は、大学や高専を出た新人者の若い技手には共通したもので（中略）教場で得た技術的知識が荒々しい工事現場ではほとんど意味をもたないという無力感であるはずであった。そして、労働にきたえられた、たくましい人夫の体と技師や技手の素気ない眼につつまれて、自分の存在が急に小さく萎えてしまつてゆくのをおぼえているにちがいがなかった。」と。高専学生の僕は、一瞬何かが胸に突き刺さるような思いに駆られた。そして、僕らの先輩に当たる技術者達が、どのように活躍していくのか、作品の展開に強い期待を持った。

掘削は開始された。だが、掘進するに連れて、岩盤温度が上昇しだしたのだ。そして、百メートル近く掘進すると、水の沸点を越してしまった。当然の事のようにダイナマイトが、自然発火し、八名の人夫の身が四散した。それからの光景は想像しただけでも嘔吐感に襲われる。それにしても、その時の根津の態度には驚かされた。彼は砕けた岩の中から四散した死体を抱えあげ、トロッコに積み出したのだ。どこからそのような勇気が出て来るのだろうか。内臓のはみ出た胴体や、ちぎれた手や足が恐ろしいのだろうか。僕は今まで人間の四散した身を見たことも、触れたこともないので、それらは世の中で最も気持ちの悪いものだという観念があるが、根津は永年の経験により薄らいだのだろうか。彼は下山した後、ちぎれた手や首などを畳針で縫い合わせて家族に引き渡した。そして、藤平に自分の行為は、家族の為ではなく、人夫達の不安と怒りを取り除く為だと言った。僕も人夫達と同じように根津の行為は罪滅ぼしの気持ちからだと思っていた。しかし、彼は罪などとは思わず、ただ隧道を貫通させる事だけを考えていたのだ。何という冷淡な人間なのだろう。仕事を完成させる為には、人が何人死んでも構わないというのか。しかし、彼のような考え方でなかったら、当時の工事最高責任者は務らなかつたことも確かだと思う。戦争で勝つ為には、どうしても原動力が必要だったのだ。ここに軍国主義時代の技術者の置かれた苦しい立場がある。

さて、その事故の後、根津と藤平は、種々な工夫を施し、工事を再開させた。しかし、正月休みも間近に迫った十二月の末、全く、思いも掛けなかった、自然の力をあからさまに見せつけられたような大事故が起った。二十七日深夜、大轟音と共に宿舍が消え去ってしまったのだ。原因は泡雪崩という、雪の粒と粒の間の圧縮された空気が、大爆発を起こし、毎秒千メートルもの爆風を起こす一種の雪崩なのだそうだ。かの室戸台風でさえも瞬間最大風速六十メートルであったのだから、泡雪崩の威力は計り知れない。その化物が、

宿舎を四十八名の人間諸共運び去ってしまったのだ。自然は本当にそんな偉大な凶暴な力を持っているのだろうか。

着工から四年の歳月と、三百余名もの人命を犠牲にして、黒部第三発電所は完成した。つい先日、通学途中の電車の中に「黒部・立山アルペンルート 御一人様二泊三日 何万何千円」などというある旅行会社の広告が掲げてあった。すっかり観光化された黒部峡谷しかし、内に秘められている壮絶な歴史は、忘れられてはならない。

「高熱隧道」を読んで

2 E 澤野井幸哉

隧道工事における技師と人夫の行動を描いたものではあるが、これはただの隧道工事ではない。人間の侵入を拒み続けた峻阻な峡谷黒部、岩盤最高温度165度という冷えることを知らない高熱地帯、そして人夫たちを容赦なく連れ去る戦争、これらの悪条件のもとでの工事などとうてい人間業ではない。そして、その中に人間の心の暖かさ、醜さが描き出されている。

僕は、藤平という技師が好きだ。いつも人夫への愛情、とは言えないかもしれないが、そのようなものを持ち続けている。僕も彼のような人物になりたいものだ。もう一人、根津という技師が出てくる。彼も、藤平も、人夫に対する気持ちは変わらないが、根津には冷たさを感じる。

次第に温度を上げる岩盤、人夫の心には不安と技師への反発の気持ちわいてくる。そうなるのも当然だろう。人夫たちは自然と高温になれてきているとはいえ、金銭のためだけに働くのだ。その中で藤平は、人夫のためを思い、水で人夫たちを冷やすことを思いつく。常に人夫たちのことを思う彼が僕は一番好きだ。

やがてダイナマイトの自然発火、そして8人の人夫の死という悲惨な事故が起こる。その中で根津は人夫たちの緊迫した危機感を感じとり、ばらばらになった8人の死体の処理を1人で行うことにより、人夫たちの心を巧みに一変させた。これが、経験から身につけた人夫を操縦するための行為であることを知り、彼の行動の中に彼の経験の厚さをあらためて知った。そして、こういう現場では学校での知識ではなく、経験がものをいうということがわかった。

冬には、宿舎が泡雪崩に襲われた。泡雪崩とは普通の雪崩と違い、爆風が襲うのだ。宿舎の二階から上が飛ばされ、84名の死者という大事故だった。中には破損度のはなはだしい遺体もあり、遺族たちは骨を引きとらなかつたものもあった。しかし、後で保険金の支給が留保されると聞くと、手あたり次第に骨を抱き

かかえ、保険金の支給を懇願した。いくら生活のためとはいえ、こんなことでは死者も浮かばれないに違いない。人間の心の醜さをここに見たような気がする。

岩盤温度の上昇、宿舎を襲う泡雪崩、態度には出さない人夫たちの技師への反発感、残りダイの爆発事故、ダイナマイトの紛失などあいついで起こる事故の中、黒部第三発電所の軌道トンネル及び水路隧道の工事は終わった。その中で藤平は、人夫のために次々と隧道内の冷却法、ダイナマイトの自然発火の防御法を考えつく。ここまで人夫たちのことを思い、そして人夫たちに尽くした技師は今までにはいなかったらう。そしてまた、これからも現れないに違いない。いつでも、そして他人のことにまでも気づく、この藤平のような技術者になりたいものだ。

233名もの死者を生んだ黒部の高熱地帯での隧道工事、この工事はいつまでも人々の語り草となることだろう。

力を尽くし「狭き門」より入れ

3 MA 大隅 慶明

「ジェローム、私はあなたに完全な歓喜を教えて上げたいのです。」というアリサにとって至上の幸福とは、また、純粋な愛とはいったい何であったのであろう。彼女が死の一瞬まで貫き通そうとした愛とは、恋人ジェロームに完全な歓喜を教えるための愛であったのだろうか。いやそれは違うと思う。アリサはその一生を苦悶と不安で埋めつくしてしまった。彼女にとってただ一つ喜びの気持ちがあったとすれば、それは自分の心の中で、そう、日記の中で、ジェロームに対し偽りの気持ちをすべて剥ぎとって純粋な心で書いた時間だけであろう。ではなぜ、その素直な心を自ら裏切つてまで、アリサはジェロームの情熱的な愛情をひたすら拒み続けたのであろうか。

それはアリサにとって、全く不幸としか言いようのなかった幼年時代にも一つの原因が存在したのだった。彼女は幼年時代に、ごく当り前に与えられるべき、母親の愛というものを全くといっていいほど与えられなかった。母親に突如として起こる発作、狂気じみた行動。これら様々の母親の行動によって、アリサは人間に対する愛というものに、一種の恐怖感や不安をいだかずにはいられなかったのだと思う。そして成人したアリサにとって、愛というものは、現実の人間との一体感ではなく、ただ神への信仰の手段にすぎなかつた。アリサ自身、ジェロームの愛というものは痛いほどわかっていたはずであった。だから、神と人間への愛の岐路に立って苦しむ彼女の悲痛な叫びが手にとるようによくわかつた。二人の間に揺れ動く愛の運命、もう

そこまで本心が出かかっているアリサ。ジェロームに守ってもらいたい、自分もジェロームを愛している。しかしその後を訪れるかもしれない幸福に自信が持てない。

しかし僕は、彼女のそんな考え方に共感、同情はできない。なぜなら、ジェロームのひたむきな愛に対し、彼女は自分の信仰で縛られた愛の殻から自力ではい出ようとしていないと思うからだ。僕はむしろジェロームに共感を覚える。ジェロームは不幸な境遇のアリサの中に、清楚で、それでいて優しい女性を見出す。そして彼女と一緒に狭き門を通り抜ける道を捜し、共に進んで行きたいと心に決める。それなのに彼女はそんな彼をなぜか頑なに拒む。それでもジェロームはひたすら、彼女を愛する。これこそが本当の意味での愛、愛するということではないだろうか。僕は本当にひたむきなジェロームに純愛を見たような気がする。

妹に対する心づかいからでも解るように、アリサは自らを犠牲にして、そして人に幸福を与えるということ、とても重要に考えていたように思う。それは確かに大切なものではあるだろうが、彼女は考え方が一方的すぎたのではなかろうか。それは自分が母親に愛されなかったという一因もあるが、僕はアリサがそのことに、こだわりすぎていると思う。なぜかと言うと妹ジュリエットが結婚したことにより、妹一家は大変幸福に見えたし、実際に幸福でもあった。しかしアリサはその様を見て、幸福とは、こんなに簡単に手に入るものではないと考え、その幸福が、自分が犠牲になって得られたものだと思ってしまう。自己犠牲の意識過剰でもいいうのだろうか。だから彼女は本当の愛、ジェロームに対しての純粋の愛には至れなかった。自己犠牲は神の愛には近くても男女の愛における極致とはいえないと思う。別の言い方をすると、アリサは、自己を燃焼させる純粋の愛、そこに獲得される幸福を恐れたばかりに、女性としての幸福な目標に至れなかったとも言えるだろう。

一方、ジェロームは、アリサへの愛をひたすら追い続けた。そしてアリサが亡くなった後でもおそらくジェロームは愛を追い続け、そして狭き門に達するのではないかと思う。そこでジェロームは今までのアリサにのみ対する愛よりも、もっと大きな何かを得るだろうと僕は考える。彼は人間として男性として愛に純粋であったからだ。

最後にこの小説は、ジェロームとアリサの単なる悲劇のロマンスだと考えることはあえてしたくない。それは力を尽くして生きた二人を見つめているうちに、今やっと後に述べる数行のもつ奥深くそして広い言葉の意味が少しわかったような気がしたからだ。僕はこの数行を一生大切にしたいと思った。

「力を尽くし狭き門より入れ。滅びにいたる門は大きく、その路は広く、これより入る者多し。生命にいたる門は狭く、その路は細く、これを見いだす者少し。」

「海と毒薬」を読んで

3MB 長井 孝之

「勝呂にはできなかった。できなかった……。」—
「海と毒薬」は、この弱々しい消え入るような最後のことで幕を閉じ、人間は弱いものだという強烈な印象を私に残した。

F大医学部の研究生勝呂と戸田は、柴田助教授からアメリカ人捕虜の生体解剖実験に参加することをもちかけられて、断りきれずに実験に立ち会う。実験後勝呂は病棟の屋上の手摺りにもたれ、良心の責苦から逃がれようとして、彼が知っているただ一つの詩を無理矢理つぶやこうとするのだが、それはことばにならなかったのである。

読後のなかなか鳴りやまない陰鬱な余韻の中で、私は落ち着かなかった。生体解剖の生々しい描写場面での興奮から、まだ脱していなかったからではない。私がひそかに恥じている自分の心の弱さを見抜かれたような気がしたからである。

私は、自らの良心をごまかしている自分の弱さに気がついて、はっとすることがよくある。だから自分の良心に真正面から対峙して生きられる人などそう多くはないと思うが、もしあればその人こそ本当に強い、偉大な人だと言ってもよかろう。そう私は思っている。

この小説の中で、戸田が中学時代を回想する場面がある。彼は博物の教師が秘蔵していた珍しい蝶の標本を標本室から盗み出す。ところが他の生徒がその犯人にされてしまうのだ。彼の罪をきせられたその生徒が運動場に立たされているのを見て、彼は心の中でつぶやく。「いいさ、あいつかてともかく標本室にはいったのやからな。盗みにはいったのやからな。あいつは莫迦やから見つかったんや。見つからなかったら俺とおなじやないか。」

彼は良心の苛責から逃がれるため、他への責任転嫁を合理化しようとする。私たちもこれと同じようなことを、日常生活の中でよくやっているのではなかろうか。しかしまた一方で私たちは、自分の良心から逃避している自分に気がついてもいるのだ。合理化が無意識のうちに行われたとしても、後になってそれに気がついて、心の中で苦笑したり、自己嫌悪に陥ったりすることが私にはしばしばある。

勝呂にはできなかった。勝呂は手術室の中で、どうしても解剖に参加できず、手術室の壁にもたれ、手術台の上の捕虜をとり囲んで解剖を続ける戸田たちを茫然とながめていたのである。実験後、屋上の手摺りにもたれている勝呂に戸田は言う。「あの捕虜のおかげで何千人の結核患者の治療法がわかるとすればあれは

殺したんやないぜ。生かしたんや。人間の良心なんて考えよう一つでどうにも変わるもんやわ。」

この戸田のような、良心を麻痺させて生きる人間に私は人間の弱さを感じる。私たちは知っているのだ。外聞や、外からの制裁にもまして良心の苛責が、苦しいものであることを。だからこそ逃げずにはいられないのではなからうか。勝呂が戸田に言う。「お前は強いなあ。」しかし、良心に嘘をつかなければ生きられない人間を、適応力が優れているとは言っても強い人間であるとは決して言えないと思う。

私たちは、気づかないうちに、良心の責苦から逃れる要領を身につけてしまったのではなからうか。そして、自分の良心をだますことになんの抵抗も感じない、私自身いつかそんな人間になってしまうことを恐れていた人間に、知らないうちに数歩も近づいていたのではなからうか。もしも、この小説にめぐり合わなければ、このようなことも考えず、徐々に良心を飼い馴らしていく自分を見ずごしていたかもしれない。

この小説は、アメリカ人捕虜の生体解剖実験という異常な事件に題材をとっているが、日常レベルに掘り下げて、人間の良心とは、また本当に強い人間とは何か、ということを考えることにより、自分にきびしく生きることのむつかしさ、尊さを、あらためて私に考えさせた。この小説の主題である、神なき日本人にとって罪の意識とは何か、という問に対しては少し違った感想をもったわけであるが、それは人間としての良心とエゴの妥協にしばしば悩まされてきた私が、自己の良心と格闘する勝呂と、良心との闘いを放棄してしまった戸田という二人の人物の心の動きを、客観的にみることにより、自分の心の中をも、ほんの少しではあるが探ることができたからであろう。

「黒い雨」を読んで

4 MB 石川 英敬

これほどまでに原爆投下後の様子を描いた物語があるだろうか。僕は原子爆弾というものの破壊力、そしてその後遺症の恐ろしさを決して知らなかったわけではなかった。広島原爆記念館にも行ったし、長崎の天主堂で被爆した人々の写真も見学した。しかし、この本を読んでからはそれらの資料はほんの微々たるもので、実際の凄惨さ、悲惨さはとても僕の想像の及ぶところではなかったことを思い知らされた。

この物語の特徴は、被爆当時の模様をすべて日記の清書という形で、淡々としかも詳細に述べていることである。このため読者には、当時の光景が目の前に浮かんでくるような効果を与えている。

八月六日午前八時、その日重松は、朝の出勤でいつ

ものように横川駅のプラットフォームから可部行の電車の乗降台に飛び乗った。そしてその瞬間、電車の左側三メートルぐらいのところにもくらくら強烈な光の球を見た。被爆したのである。彼の左の頬には一生消えることのない原爆の爪あとが残った。

彼は妻のシゲ子と再会し、ついで姪の矢須子とも再会することができた。人々が混乱で右往左往する中で再会は奇跡に近い。彼らは重松の勤める工場へ向うが、その途中でこの世のものとは思われぬほどの恐ろしい光景を目にする。煙と熱気と放射能が立ちこめ、黒こげの死体が重なる中を、彼らはひたすら生に向かってはい進んだ。生きていても血を流していない者はないのである。重松たちは自分たちの背後から襲いかかる死の足音を聞き、戦慄を覚えたにちがいない。

戦後数年もたって、突然姪の矢須子が発病した。彼女は直接被爆したわけではない。帰宅途中、夕立に会ったのだ。不気味なキノコ雲が降らせるあの黒い夕立に。彼女の症状は、絶望的であった。矢須子だけではない。三十六年たった今日でもなお原爆病に苦しむ人がいるのだ。

原爆による放射能汚染は、被爆した本人だけに留まらない。彼らの子孫にも影のようにつきまとう。黒く重たく。放射能は彼らの遺伝子に潜むのだ。そして忘れたところにキバをむく。彼らは被爆者二世、三世と呼ばれ、生まれながらにハンデを背負うことになる。凄じ原爆の暴威である。

現在、日本は経済大国と言われ、戦争の傷あとは表面的にはどこにも見つけることはできない。戦争が終わって三十六年たつのである。世代も変わり、年々、人々の胸からは戦争の忌わしい思い出がうすれていく。広島、長崎もともに日本の大都市に数えられるほどの復興を見せている。数十年は草木も茂らず、生物の住めない廃墟になるといわれた街を立ち直らせたのだ。

最近米ソ間の関係が悪化し、互いに核による威嚇を行なっている。いや、米ソ間だけではない。各国とも軍備を拡張し、核保有国が持たない国を威嚇するという状況が出てきている。八月十日付けの新聞に、アメリカが中性子爆弾の製造を決定したとあった。アメリカが核を製造すればそれに対応してソ連も造るだろう。なぜ核をこれ以上増やすのか。その行為は、人類が自らの首を縛ることにほかならないものを。

年を追うごとに、国が繁栄するごとに戦争は日本人の記憶から風化され消えてゆく。僕らはまして戦争を知らない世代だ。その僕らも年をとってゆく。世代はさらに変わり、戦争を全く知らない人口が過半数、大多数になる日もそう遠くはない。原爆記念式典も単なる行事として人々の目に心に映る日がくるだろう。しかし、ここで考えてもらいたい。なぜ重松は、インクで書かずに毛筆で墨で一字一字清書したのかを。被爆後の日記の文字があせないように、いつまでもその黒い文字が人々の胸に残るよう願いをこめている。だから「黒い雨」はいつまでも読みつがれなければならない

いのだ。

「パリ日本館だより」を読んで

4 E 和田 徳洋

「パリ日本館だより」と言っても、大抵の人はどのような本か分らないだろう。この本は、パリ大学都市における留学生の収容施設である日本館の館長を二年間勤めた著者が「毎日が国際誤解」の体験の中から、フランス人と日本人の発想法の違いを明かし、フランス人の素顔を描き日本人を捉え直す日仏比較論である。副題が、「フランス人とつきあう法」とあるごとく、フランス人の根本的な性格を述べ、彼らとの相互理解に到る交際法が記されている。

まず誰でも読んでみて驚くのは、フランス人の個人主義の強さである。日本における下手な自己主張というものは、利己主義的なものと見られるが、彼らの国においては、自分というものをたとえどんな形でも相手に表現できぬ者は、無能ということになり、半人前としか受け取ってはくれない。そのためか彼らは、ごく些細な意見の食い違いでさえ華々しい議論、口論にまで発展させてしまう。

だが、自分を主張することを認められない人間がフランスには居る。それは子供たちである。彼らは親の所有物にすぎず、彼らの意見はまず大人たちに聞き入れてもらえない。それゆえ、子供たちの心の中には早くから自立ということが芽ばえ、高校卒業後、男子の大半と女子の大部分が親のもとから離れて生活し、一人前の人間としての生活を送るという。そのせいか、日本に見られる過保護という現象は存在しないらしい。この点は多少なりとも日本人は見習った方がよいのではないだろうかと思う。

なお、ここで述べておくが、自分はパリを「花の都」

などと思っている中高年層ではないし、もちろんミューサー的な人種ではない。自分の目にはフランスは遅れた国としか写らない。金融市場の中にはマルク、ポンドは扱われているのにフランは扱わないところがあるし、これは実際の体験から述べるが、シャンゼリゼ通りやパリのメトロは御堂筋や大阪の地下鉄より古いのはともかく、ゴミなどの人為的要因で汚れている。彼らの国は木と土と紙ではなく、石と鉄で出来ているので一度出来上がれば、手を加えにくいとしても、なぜもう少し努力がなされないのかと不思議である。

そして、フランスにはないよいものがわが国にはあるらしい。年功序列制である。これがあるから大部分の人が張り合いがもてるので、これがないフランスでは、出世というものは一部の限られたエリートのもので平社員はいつまでたっても平社員である。年功序列はフランスだけではなく、他の欧州諸国では考えられないものである。すなわち、日本の社会環境は、どの外国と比べても特殊なものだと我々は肝に銘じておく必要があると思う。大体、単一民族国家で、大地の上に国境を持たず、有史以来他国からの侵略を受けなかった国はわが国ぐらいしかなく、これが日本の人間環境を非常に珍しいものにしてている。

したがって、フランス人はこの奇妙なことの多い日本に古くから関心を示しており、現在では経済摩擦などの点から必然的に「知ること」を要求されている。にもかかわらず、日本政府の国際交流の糧となる外交費はフランス政府のその約半分だそうである。これが経済大国と呼ばれるにふさわしいものであろうか。しかも、現在の日本を知りたがっている彼らに、能、歌舞伎など日本人でさえ見向きもしないものを紹介して何になるのだろうか。これなら、日本人はいまだに刀を差しているという誤解が生まれて当然である。

フランス人だけでなく外国人とつき合うには、いま頭の中にある固定観念を完全に捨てた上で彼らをよく見つめること、国際理解に到達するためには、国際誤解を積まなければならないし、それを恐れてはいけないことを痛感させられた本であった。

「奈良高専必読図書100選」について

このたび、学生諸君の良書選定の手助けとして、「奈良高専必読図書100選」を選定し、図書室に陳列しました。内容は次のとおりであります。5年間の学生生活の間に一冊でも多く読まれることを希望します。

〔人間と人生〕

論語	金谷 治訳注	岩波文庫
聖書		
パンセ	Blaise, Pascal'	中央文庫
青春の生き方	A. J. Crorin	三笠書房
生きがいについて	神谷美恵子	みすず書房
人生論	武者小路実篤	角川文庫
友情論	Bonald	角川文庫
感情の世界	島崎 敏樹	岩波新書
恋愛なんかやめておけ	松田 道雄	ちくま少年図書館
誰のために愛するか	曾野 綾子	角川文庫

〔ものの見方・考え方〕

考え方の論理	沢田 允茂	講談社学術文庫
ものの見方について	笠 信太郎	角川文庫
日本人の心理	南 博	岩波新書
言葉の力	川崎ひろし	岩ジュ新書
方法序説	Rene' Descartes'	角川文庫
理科系の作文技術	木下 是雄	中公新書
考えるヒント	小林 秀雄	文春文庫
近代人の疎外	F. Pappenheim	岩波新書
哲学入門	野田 又夫	ミネルヴァ文庫

〔歴史・社会・文化〕

黄河の水	鳥山 喜一	角川文庫
世界の歩み	林 健太郎	岩波新書
風土	和辻 哲郎	岩波文庫
奈良	直木孝次郎	岩波新書
大和古寺風物誌	亀井勝一郎	新潮社
日本古典入門	池田 亀鑑	講談社学術文庫
菊と刀	Ruth Benedict	教養文庫
こんな差別が	小林 初枝	ちくま少年図書館
日本人とユダヤ人	Isaiah Bendasan	角川文庫
法隆寺を支えた木	西岡常一・小原二郎	NHKブックス
食べものと日本人	河野 友美	講談社新書
あゝ野麦峠	山本 茂美	角川文庫

〔伝記（創造者・開拓者）〕

リンカーン	K. C. Wheare	岩波新書
アインシュタインの生涯	Selich	東京図書
バストゥール	川喜多愛郎	岩波新書
ダーウィンの生涯	八杉 竜一	岩波新書
ピエール・キュリーの生涯	M. Curie	白水社
ロダンの言葉抄	高村光太郎編	岩波文庫
玄奘三蔵	前嶋 信次	岩波新書
零の発見	吉田 洋一	岩波新書

〔科学と技術〕

ローソクの科学	Faraday	岩波文庫
科学の方法	中谷宇吉郎	岩波新書
物理学とは何だろうか	朝永振一郎	岩波新書
原子核の世界	菊池 正士	岩波新書
エレクトロンの話	関 英雄	NHKブックス
プラスチック	井本 稔	岩波新書
日本の化学工業	渡辺 徳三	岩波新書
宇宙空間への道	畑中 武夫	岩波新書
鋼の時代	中沢 護人	岩波新書

〔自然と人間〕

われら動物みな兄弟	畑 正憲	角川文庫
人類最後の日	宮脇 昭	ちくま少年図書館
沈黙の春	Rachael Carson	新潮文庫

ゴリラとピグミーの森	伊谷純一郎	岩波新書
水は生きている	梶谷よしひこ	恒和出版

〔運転の心と科学〕

がむしゃら一五〇〇キロ	浮谷東次郎	ちくま少年文庫
安全運転の科学	末永 一男	NHKブックス
自動車の社会的費用	宇沢 弘文	岩波新書

〔日本文学〕

こゝろ	夏目 漱石	岩波文庫
田舎教師	田山 花袋	岩波文庫
阿部一族	森 鷗外	岩波文庫
破戒	島崎 藤村	新潮社
銀の匙	中 勘助	岩波文庫
友情	武者小路実篤	新潮文庫
生れ出づる悩み	有島 武郎	旺文社文庫
枯れの抄	芥川竜之介	角川書店
高村光太郎詩集	高村光太郎	新潮文庫
伊豆の踊子	川端 康成	新潮社
播州平野	宮本百合子	新潮文庫
李 陵	中島 敦	新潮文庫
真空地帯	野間 宏	新潮文庫
天平の壺	井上 靖	新潮文庫
おとうと	幸田 文	新潮文庫
黒い雨	井伏 鱒二	新潮文庫
海と毒薬	遠藤 周作	新潮文庫
さぶ	山本周五郎	新潮文庫
潮騒	三島由起夫	新潮文庫
華岡青洲の妻	有吉佐和子	新潮文庫
殉死	司馬遼太郎	文春文庫
榆家の人々	北 杜夫	新潮文庫
富士山頂	新田 次郎	文春文庫
高熱隧道	吉村 昭	新潮文庫
九月の空	高橋三千綱	角川文庫
暗夜行路	志賀 直哉	岩波文庫

〔外国文学〕

人間の絆	S. Maughan	新潮文庫
阿Q正傳	魯 迅	岩波文庫
怒りのぶどう	J. E. Steinbeck	新潮文庫
車輪の下	H. Hesse	新潮文庫・角川文庫
ジャン・クリストフ	Romain Rolland	岩波文庫
古代の情熱	H. Schliemann	岩波文庫
チポー家の人々	Roger Martin du Gard	白水社
罪と罰	F. M. Dostoevskii	新潮文庫
どん底	Makcim Gorykii	岩波文庫
変身	Franz Kafka	角川文庫
トニオ・クレゲル	Phomas Mann	新潮文庫
西部戦線異状なし	Erich Maria Remarque'	新潮文庫
大地	Peare S. Buck	新潮文庫
老人と海	Ernest Hemingway	新潮文庫
ドン・キホーテ	Miguelde Cervantes	岩波文庫
息子と恋人	D. H. Lawrence	新潮文庫
ウィルヘルム・マイステルの修業時代	J. W. Goethe	人文書院
マルテの手記	RainerMarie Rilke	新潮文庫
白鯨	Herman Melville	新潮文庫
風と共に去りぬ	Margaret Mitchel	新潮文庫